【東日本大震災（石巻赤十字病院）救護活動報告】

救急部医師　村井　隆太

このたび、平成 23 年 4 月 28 日～5 月 5 日まで、石巻赤十字病院救命救急センターへ災害派遣に行ってまいりました。この派遣は日本赤十字社本社事業で、全国各地の赤十字施設から人材が集められ、東京本社に集合解散、現地まではバスでの陸路移動というスタイルでした。

石巻市は、皆さんもテレビ等でご存知の津波被害が甚大な海側と、比較的被害の少なかった山側に地形は分けられますが、石巻赤十字病院は山側に位置しています。石巻市内の病院のほとんどが海側に位置していて、今回の震災で被災し、唯一残ったのが石巻赤十字病院でした。また石巻医療圏(石巻市・女川町・東松島市・登米市)には 50 万人強の人口を抱えていて(ほぼ東大阪市と同じ人口)、被災後に救命救急医療を展開しているのは女川町立病院と石巻日赤 2 病院で、3 次救命救急センターは石巻赤十字病院だけでした。

石巻日赤救命救急センターの医師は3交代制で、到着するや否や準夜をし、翌日からは毎日遅番(正午～夜 8 時)で、最終日は日勤をしました。救急車は 1 日 30～40 台で、搬送されてくる患者さんは様々で、避難所から搬送されてくる場合は比較的軽症が多いのですが、交通事故や、復興支援でがれきの撤去や建築作業中の労災事故も搬送されてきました。内因性疾患で多かったのが、避難所での生活による感染性腸炎や高齢者の肺炎で約60%位を占めていました。残りの40%が外傷で、多かったのが倒壊家屋の片付け中での四肢切創・挫創・骨折でした。中には、車両との交通事故での多発外傷、復旧作業重機による多発外傷、屋根などからの高所墜落、避難所内での心肺停止等、3 次救急症例も全体の15%位含まれていました。その中でも印象的だったのが、避難所に避難されていた 94 歳の男性が、果物ナイフで割腹自殺してきたことです。先行きを案じてとのことでした。

今回の派遣で、ライフライン等のハード面の復旧は徐々に始まってきた印象を受けましたが、被災者のメンタル的な回復はまだまだで、介入する余地が十分あるということを感じ、最後の砦となっている石巻赤十字病院のスタッフの心意気に、感動しました。

管財課　施設係長　松井　克男

私は4月24日から29日の6日間、石巻赤十字病院内にある石巻圏合同救護チーム災害対策本部において事務支援要員として従事しました。

この合同救護チームは日赤の医療班だけでなく、医師会・大学・各都道府県編成のDMAT（災害派遣医療チーム）等様々な組織から派遣された医療班を統括協働する組織で、その本部に新たに到着した救護班の受け入れ・オリエンテーションなどの業務のほか、石巻圏域に約 300 箇所ある避難所の把握・情報収集が主な任務で、特に避難所情報の登録作業（アセスメントシートの作成）については、処理すべきデータの量が膨大で、毎日深夜まで及ぶこともありました。それほど、現地ではまだまだ避難所の把握に難渋している状態でした。

活動初日、2時間足らずの業務引継ぎを前班から受けてすぐ本部に配属された時には、不安でいっぱいでしたが、石巻赤十字病院の外来受付事務の補助業務を行っている際、被災された方々とお話をさせていただく機会があり、「今は真っ直ぐ前を向いて歩くことが自分の仕事であり、それが自身や周囲の人（家族・友人）への配慮です。」という言葉が今でも印象に残っており、東北の方の性格なのか、辛いこと、苦しいことを心の中に秘めながら、明るく話されている凛とした姿に感銘を受け、今自身でできる範囲のことを精一杯積み重ねていくことを期間中の目標とし、任務に励むことが出来ました。

各避難所や災害対策本部において、状況やそれらの対策・運用が日ごとに刻々と変化していく中で多くの皆さんのおかげで少しでもお手伝いができたことに感謝いたします。

石巻圏合同救護チーム災害対策本部内

全体ミーティングが行われていた会議室内に
掲示されていたスローガン
『東北一活気ある病院』

薬剤部　薬剤師　吉岡　訓子

宮城県石巻市では、市立病院をはじめ多くの病院が震災後の津波により大きな被害を受けました。医療の唯一の拠点となっている石巻赤十字病院では、医療スタッフが不足しており、私は 4 月 24 日から 29 日の6日間、石巻赤十字病院薬剤師支援要員として活動しました。

支援業務は、院内業務支援と院外業務支援の大きく分けて2つでした。院内業務は、日勤および夜勤の調剤業務補助と救護班からの処方箋受付が主な仕事でした。病棟業務の縮小や新人薬剤師の成長により、院内業務は比較的安定した状態でした。院外業務は、避難所巡回チームの活動支援が主な仕事でした。このチームは、交通機関が無いために長期投与薬の受け取りが困難な被災者を対象に処方・薬の送付を行うことを目的として、発足しました。活動内容は「お薬配達」のみならず、服薬指導、お薬手帳配布による患者情報の一括管理、健康状態を確認し、受診の必要性の判断・状態に応じた OTC の配布、避難所のトイレなどの衛生状態の確認・指導など様々なことを行っていました。ただ、この様なニーズがまだまだある地域がある反面、周辺の診療所や調剤薬局が再開し始めている地域もあり、その復興を妨げないように規模の縮小化を検討する動きもありました。

私にとって今回の派遣は、発災から2ヶ月弱という時間の経過により発災直後とは違った次のステップの支援が必要である、ということに気付かせてくれたり、何が求められているのか、というこれまであまり考えたことのない事について考える機会となりました。また、共に過ごした4人の薬剤師仲間(山田日赤、名古屋第一・第二日赤、武蔵野日赤)に支えられた6日間でした。

今後の防災に役立つようにと災害状況とその後の活動についての情報を伝えるという姿勢で受け入れてくださった石巻赤十字病院の方々に感謝し、1 日も早い復興を祈念しています。

石巻市内の状況

避難所の状況